

自由の声

自由の声

1993年2月

No. 1 発行 アジア・アフリカと共に歩む会

英語の本、南アフリカに到着する

皆様からの教科書、本、送料の寄付によって送付した2000冊が南ア・キンバリーに到着しました。お正月にキンバリーのセンターを訪ねた反差別国際運動(IMADR)の松本めぐみさんから報告がありました。送り状と照らし合わせてすべて着いたことを確認して下さいました。ヘレン・ジョセフ女性開発センターのリーダー、ユニス・コマネさんからのおたより：

My Dear Friend Chikako -Son

I hope you enjoyed the festive season. Thank you very much for the Christmas card although it come after new year.

We enjoyed the visit of Ms Matsumoto very much.

The books you sent arrived in the same week she came. We have not really started the library yet because we wanted to finish the repairing of the building. So I am going to start cataloging the books this week to have them ready when the building is finished.

Thank you also for the pencils we really appreciate them.

I think you will get a good report of our progress from Ms. Matsumoto.

My to all my friends.



EVG. KOMANE



千香子さん

年末年始、楽しくお過ごしになったことと思います。クリスマスカードは、今年になって到着しましたが、本当にありがとうございました。松本さんが来て下さったのは本当にうれしいことでした。

あなたがたの送って下さった本は彼女が来た週に着きました。建物の改修がまだ終わっていないために、私たちはまだ図書室を開設していません。それで建物が完成した時に備えて、今週から本の目録を作り始めようと思います。鉛筆なども本当にありがとうございます。感謝します。

松本さんから私たちの活動が進んでいるという良い報告を聞いて下さい。私のすべてのお友達によろしく。

ユニス・コマネ

中学の教科書SUNSHINEを手にとるユニスさん：右
(写真 松本めぐみさん)

特集 Ⅱ 村を変える女たち

イシナンバに

歌声が響くとき

真の解放をめざして

イシナンバ地域開発センター代表
ノクゾラ・マギダ

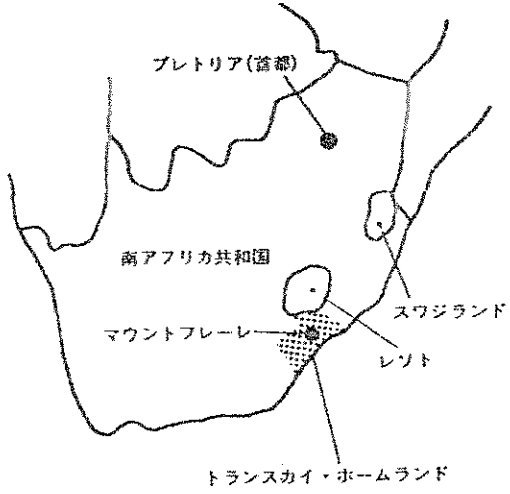
11月10日、南アから一人の大柄な女性が来日した。名前はノクゾラ・マギダ。差別と抑圧に苦しむ南アの農村で、女性の開発にとりくむグループのリーダーだ。二週間の滞在中、彼女は各地で精力的に講演会やワークショップを行い、私たちに素晴らしいショックを与えてくれた。彼女が村を変えていく過程とその現状を、彼女の言葉からまとめてみた。(編集部)

アパルトヘイトの底辺で 抑圧されてきた女たち

イシナンバ地域開発センターは、南アの典型的なホームランドであるトランスカイの、マウントフレレ村に設立された、女性による協同組合活動だ。設立者はエドモンド・ドゥマニ・グウィリザ、そしてマグネライン・グウィリザ。私の両親である。聖職者だった父は、このセンターに真の社会変革の夢を賭けていた。しかし1978年、暗殺。私は父の遺志を継いで、人々の意識を覚醒させるためにイシナンバへ来た。

さて、私たちが村でアプローチをしていく上で最も重要なことは、人々の意識化、そして心理的解放ということだ。それと同

この記事はJVCのTrial and Errorから転載しました。



SOUTH AFRICA

時に「開発」とは何なのかを考えなければならない。開発については、既に様々な本や理論の中で言われているように、経済的、社会的、政治的な発展、また心理的な発展が含まれる。私は特に後者の「心理的な目覚め」が他の面にとっても大きな影響を与えると思う。開発は地域や国によって異なるが、イシナンバ地域開発センターの場合は次のような状況である。

まず、トランスカイ・ホームランドにあるということ。そこは農村でありアパルトヘイトによる貧困、環境破壊が厳しい土地だ。

次に、マタンジマ政権の厳しい弾圧。76年にホームランドが独立させられたとき、人々は声をあげることもできなかった。



▲ワークショップには歌と踊りが欠かせない



▲B本での機織は民族衣装で(江の島国際会議にて)

三番目に、人々は外からの情報や新聞もない孤立した状況に置かれていた。

このように、アバルトヘイトは黒人を非人間化させ、尊敬、自信を喪失させ、自分人間以下だから、何もできない!と思いつまらせていった。

まず最初にやるべきことは、自己の発見と人間性の獲得だ。イシナンバの発端は、心理的な自覚めを開始することにある。

黒人の私にも キャンドルが作れた

私は自分の生まれた村に戻り、父の後に続いて農村開発を行おうと思った。が、それでも村の人々に受け入れられるのは難しい。なぜなら、これまで「開発」を掲げて入ってきた人はみんな自分のことばかりを考えていたから。地域に馴染みのない人間が来ていきなり「みなさんの今抱えている問題は何ですか」と聞いたところで、村人は心を開かないし、ましてや、解決するにはどうしたらいいと思いますか!などと言っても、困惑するだけだ。村の人々が私のやりたいことに興味を持つまで三年間、私は待ち続けた。

プログラムを進めるには話をするだけではなく、実体験をするのが重要だ。そこで、キャンドル作りの道具(型とワックス)を持って行き、みんなで体験する。キャンドルができたときの人々の目の輝き、そして、白人だけがキャンドルを作れると思っていたけど、私たちにも出来る!と、う発見。女性たちは体験を通して自覚めていく。

自分への自信、あるいは人間の尊敬の回復は、それらの中で行われる。また彼女た

ちは社会の状況にも気付き始める。他の所には水があるのに、なぜ私たちの所にはないんだらう。電気は、電話は:」。

解決していくべき問題には、飢餓をなくす、収入を増やす、保健衛生を良くしていく、などがある。しかし単に貧困やアバルトヘイトの抑圧だけに目を向けるのではない。自分たちのいる公正でない社会を、自分たちの力で変えていく、という過程を通して、彼女たちは自分で決定していくことを体験するのだ。

三つのステップで 村が変わっていく

このように、私たちは農村の中での持続的な開発を考えてきたわけだが、その経験の中で次のようなプログラムを作り出した。

・第一段階 「気付き」あるいは「自覚め」と表せる意識化の段階。人々が自分の可能性に気付き、人間の尊厳を回復していく過程である。自立へのプログラムに重点をおき、保健教育、基本的な教育、技能向上、農業などを進めている。人々が「何を習いたいのか、どんなことをやりたいのか」を考え、私たちはプログラムを提供していく。

・第二段階 協同組合の準備期。村民は自分たちでプログラムを運営する委員会をつくり、準備の整ったグループは4カ月間の研修を受ける。その内容は、協同組合の基本、現在の環境で実践可能なことの調査、マーケティング、簿記など。この場合の協同組合は、単に経済的な意味ではなく、社会的、政治的に地域を変えていくための協力をする、という複合的な意味を持つ。これを運営できる村は、最初に長期低利貸付

の融資を受けることができる。

・第三段階 協同組合の完成期。ここまで到達した村はまだないのだが、各村の組合は独立運営になり、第二段階でよい成績を取めると、この時に銀行から融資を受けられる。第一段階で得た自己価値への自覚めと、地域での自立性というものが、協同組合を自主運営する上で非常に重要になる。

デュックさんは 初めて馬を買った

ここでイシナンバのメンパーであるデュックさんの経験を紹介しよう。彼女は長年にわたってワークショップを体験し、その結果、真の意味での自己発見の旅を始めた。「私は養殖で貯めたお金で馬を買いました。今まで、この村で馬を買ったのは男性だけでした。私は村で初めて馬を買った女性なのです。これは真の意味での達成です。だから女性にちなんで馬をマダム・ブラウスと名付けました」

これはデュックさんが人間としての自己意識を高めるのと同時に、自分自身を高めることを実証した例である。それまで女性は男性支配の対象であったり、地域に存在する単なるモノだった。そこから彼女は立ち上がったのだ。馬は、彼女が劣等感や自信喪失、あるいは自己否定から脱出した象徴である。そして重要なのは、これを彼女自身が認識している、という点なのだ。

イシナンバ!

最後に笑うのは私たち

イシナンバ地域開発センターでは、毎月一回、二日間に渡ってワークショップを行っ

